Asian Journal of

HUMAN SERVICES

Printed 2013.0430 ISSN2186-3350

Published by Asian Society of Human Services

April 2013

VOL. 4

Asian Society of Human Services

Human Services

Asian Journal of Human Services，VOL.4　62-76

ORIGINAL ARTICLE

過程分離手続きを用いた抑うつにおける記憶バイアスの検討:うつ病対策に向けての基礎的研究

Memory Biases in Depression Investigated by the Process Dissociation Procedure to Develop Countermeasure against Depression

田上 恭子 [1)]　(Kyoko TAGAMI)

1)　愛知県立大学看護学部
〒463-8502　愛知県名古屋市守山区上志段味東谷
tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp

ABSTRACT

うつ病対策の一環として，認知行動療法の普及とさらなる発展が求められている。認知行動療法の基礎理論である認知理論を展開するために，本研究では，抑うつにおける気分一致記憶バイアスについて，過程分離手続きを用いて検討した。専門学校生 146 名が以下の 3 つが含まれる冊子に回答した。それは，(a) 学習段階としての性格表現用語の自己関連度評定，(b) テスト段階としての単語検索課題(包含テスト条件と除外テスト条件)，(c) ベック抑うつ尺度，であった。結果から，軽度抑うつ者においてポジティブ語に関する統制的プロセスの寄与がネガティブ語よりも高いが，非抑うつ者ではその逆であること，一方自動的プロセスの寄与に関しては抑うつ状態にかかわらず，軽度抑うつ者においても非抑うつ者においてもポジティブ語に関してネガティブ語よりも高いことが示された。これらの結果は，気分一致記憶バイアス及び抑うつの認知理論の観点から論じられる。

The development and dissemination of cognitive-behavioral therapy are necessary as a countermeasure against depression. Mood-congruent memory biases in mildly depressed students were investigated by using the process dissociation procedure to explicate the cognitive theory underlying cognitive-behavioral therapy. Participants (N=146) completed a booklet consisting of three tasks: (a) self-relevant ratings of personality trait words in the study phase, (b) a word retrieval task (inclusion and exclusion test condition) as the test phase, and (c) the Beck Depression Inventory. Results indicated that in mildly depressed students, the contribution of the controlled processes was higher for positive words than for negative words, and vice versa in non-depressed students,

Received
February 28,2013

Accepted
April 11,2013

Published
April 30,2013

whereas the contribution of the automatic processes was higher for positive words in both mildly depressed and non-depressed students. These findings are discussed in terms of mood-congruent memory biases and the cognitive theory of depression.

＜Key-words＞
うつ病，気分一致記憶バイアス，過程分離手続き，認知行動療法
depression, mood-congruent memory biases, process dissociation procedure, cognitive-behavioral therapy
Asian J Human Services, 2013, 4:62-76. © 2013 Asian Society of Human Services

Ⅰ．問題と目的

1. 日本におけるうつ病の現状と対策

近年，日本においてはうつ病の増加及び自殺者数の増加に伴い，その対策が急務となっている。厚生労働省が 3 年ごとに行っている「患者調査」(厚生労働省, 2012)によると，うつ病等の気分障害の総患者数は 2011 年では約 95 万人であり，12 年前に比べて 2 倍以上の増加が見られている。厚生労働省の自殺･うつ病等対策プロジェクトチームでは，自殺の背景に，さまざまな精神疾患が関連することが多いことから，認知行動療法の普及等のうつ病対策の充実を対策として掲げてもいる(厚生労働省自殺･うつ病等対策プロジェクトチーム, 2010)。

うつ病の治療としての認知行動療法の適用は海外においても推奨されており，その治療効果も実証されてきている(清水･鈴木, 2011)。このような背景から，2010 年，認知行動療法の診療報酬上の評価が新設され，保険適用が可能となった。うつ病の対策に向け，国をあげてその普及に努めているところであるといえる。

2. 認知行動療法と抑うつの認知理論

認知行動療法とはどのようなものか。熊野(2012)によれば，その意味する内容は多様であり，行動療法の部分集合として説明されることがある一方で，うつ病を対象にして登場した認知療法がみずからの体系を狭義の認知行動療法の一部として位置づけるようになってきたこともあり，その結果，行動療法的な色彩の強い，学習理論の発展変化の過程として捉えられるものと，認知療法的な色彩の強い，情報処理理論に基づき新たな治療体系と位置づけられるものの両方の意味で使われるようになっているという。厚生労働省のうつ病対策における認知療法･認知行動療法の治療者用マニュアル(慶應義塾大学認知行動療法研究会，2009)はこの後者の立場であると考えられ，本研究においてもこのうつ病を対象にして登場した認知療法的な立場に焦点を当てる。

認知療法は，Beck(Beck, 1976; Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1978)によって開発された心理療法である。認知の歪みを変容させることを重視するものであり，ネガティブな自動思考をモニタリングし，その思考が気分に及ぼす影響を調べ，それに替わる思考法を考え出し，前提となっている信念(スキーマ)を明らかにしていく(Newell & Dryden, 1991　丹野訳　1996)。厚生労働省のマニュアルにおける具体的な流れは表 1 の通りである。

表 1 認知療法･認知行動療法の治療全体の流れ
(慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009, p.3 より一部改変し引用)

ステージ	セッション	目的	アジェンダ（課題）	使用ツール･配布物
1	1-2	・症例を理解する ・心理教育と動機付け ・認知療法へ socialization	・症状･経過･発達歴などの問診 ・うつ病，認知モデル，治療構造の心理教育	・うつ病とは ・認知行動療法とは
2	3-4	・症例の概念化 ・治療目標の設定 ・患者を活性化する	・治療目標(患者の期待)を話し合う ・治療目標についての話し合い ・活動スケジュール表など	・問題リスト ・活動記録表
3	5-6	・気分･自動思考の同定	・3 つのコラム	・コラム法～考えを切り替えましょう
4	7-12	・自動思考の検証 (・対人関係の解決) (・問題解決技法)	・コラム法 (・オプション:人間関係を改善する) (・オプション:問題解決)	・バランス思考のコツ ・認知のかたよりとは ・人間関係モジュール ・問題解決モジュール
5	13-14	・スキーマの同定	・上記の継続 ・スキーマについての話し合い	・「心の法則」とは ・心の法則リスト
6	15-16	・終結と再発予防	・治療のふりかえり ・再発予防 ・ブースター･セッションの準備 ・治療期間延長について決定する	・治療を終了するにあたって

認知療法の理論としては，近年発達してきた情報処理モデルないしは認知モデルを基盤にしている(慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009)。たとえば Beck ら(Beck, 1976; Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1978)は，うつ病者が自分自身，将来，世界をネガティブに捉えること，すなわち認知のネガティブな歪みがみられることを指摘した。そしてこの認知の歪みが抑うつをもたらし，持続させるという認知モデルを提唱している。また 1970 年代後半になると，実験心理学の立場から感情と認知の相互作用として抑うつにおける認知の歪みを捉えようとする試みが盛んになり，気分に一致した感情価を持つ情報の処理は促進されやすいという気分一致効果(mood-congruent effects; Bower, 1981)が注目を浴びた。たとえば抑うつ状態ではネガティブな認知を行いやすいという現象である。この気分一致効果は認知行動的病理学の基礎理論の一つとしても位置づけられているが(越川, 2010)，抑うつにおける認知のネガティブな歪みを, 気分一致効果という現象に着目し明らかにしようとする実証研究が 1980 年代急増している。気分一致効果研究で扱われる認知の範囲は非常に幅広く，注意，記憶，判断，推論など多岐に渡っている。数々の実証研究からは，必ずしもすべての認知において気分一致効果が認められるわけではないことも見出されており, Beck の認知モデルや Bower の気分一致効果を説明するネットワーク･モデルからは説明できない現象も生じてきている。中でも記憶領域においては，その基礎的研究が 1980 年代顕著な発展を遂げていく中で，新たなモデルや理論, 測定法も登場し, その違いによって抑うつとの関連も異なることが見出されてきている。抑うつにおける記憶の気分一致バイアスに関しては，新たなモデルの構築に向けて今なお研究が続けられているといえよう。

3.　抑うつにおける記憶の気分一致バイアスに関する研究

前述の通り，抑うつにおける記憶の気分一致バイアスに関する研究は 1970 年代から 1990 年代にかけて，非常に数多く行われてきた。初期の研究では，ほぼ一貫して抑うつにおいてはネガティブな感情価を持つ情報の記憶が促進されるという気分一致効果が認められ，この気分一致効果が抑うつの持続や発症に重要な役割を果たしていることも指摘されてきている(Blaney, 1986; Teasdale, 1983; Watkins, Vache, Verney, Mathews, & Muller, 1996)。

しかし初期の研究のほとんでは，再生や再認などを測度とする顕在記憶(explicit memory)，すなわち学習時のエピソードの意識的な想起を求める記憶(藤田，1994)が対象となっていた。これに対して，先行学習のエピソードの意識的想起を必要としない記憶は潜在記憶(implicit memory)と呼ばれる(藤田，1994)。記憶に関する基礎的研究において，このような顕在記憶と潜在記憶との区分や分離(dissociation)についてが見出されて主張されてきた中(Graf & Schacter, 1985; Roediger, 1990; Schacter, 1987)，抑うつにおける記憶の気分一致バイアスにおいても 1990 年代に入りこの違いが注目されるようになった。したがって，これまで数多くの研究で示されてきた気分一致記憶バイアスは，潜在記憶を対象とした場合において必ずしも同様に認められるとは限らないと考えられる。また，日常生活において顕在記憶が用いられているのはほんの一部に過ぎず，記憶の大半は無意識的なもの，すなわち潜在記憶が用いられているということも指摘されている(Watkins et al.,1996)。以上から，抑うつにおける気分一致効果が抑うつの持続や発症に重要な役割を果たしていると認知療法の基礎的理論として位置づけるのであれば，広く記憶や認知において認められる現象であることを明らかにすることが必要であり，潜在記憶に関しても同様に検討する必要があると考えられる。このように抑うつにおける潜在記憶を検討することは極めて重要であるという認識が高まり，1990 年代に入り，抑うつにおける認知に関する研究においても潜在記憶が数多く取り上げられるようになった。

1990 年代の初期の抑うつ-潜在記憶研究では, 抑うつにおける気分一致記憶バイアスは示されないことが多かった(Denny & Hunt, 1992; Watkins, Mathews, Williamson, & Fuller, 1992)。この点に関して Roediger & McDermott(1992)は，記憶テストにおけるデータ駆動型処理(data driven processing)と概念駆動型処理(conceptually driven processing)との相違，すなわちテストで必要とされる処理方略の相違に関する問題を指摘している。データ駆動型処理とは刺激の知覚的形態に関するより表層的な処理を指し，一方概念駆動型処理とは刺激の意味や概念に関するより深い処理を指す(Roediger, 1990; Roediger & McDermott, 1992)。Roediger & McDermott(1992)は，初期の抑うつ-潜在記憶研究で記憶課題とされてきた単語完成や知覚同定といったデータ駆動型テストでは気分一致バイアスは示されないが，自由連想やカテゴリー判断というような意味的･概念的処理を伴う概念駆動型テストではバイアスが認められる可能性があると述べている。

この指摘に基づき，概念駆動型テストである自由連想課題を用いた潜在記憶パラダイムにおいて抑うつにおける気分一致効果を検討した Watkins et al.(1996)では，抑うつにおいて抑うつ語の潜在記憶パフォーマンスが高くなるという気分一致効果が認められた。しかし，自由連想課題を用いた田上(1999)では，抑うつにおいてポジティブ語の潜在記憶パフォーマンスが高くなるという気分不一致効果が示された。さらに，Watkins, Martin, & Stern(2000)では，2 種類のデータ駆動型課題, 2 種類の概念駆動型課題という 4 種類の潜在記憶課題を用いて抑

うつにおける気分一致バイアスを検討したが，気分一致バイアスが見出されたのは概念駆動型課題のうちのひとつである単語検索課題(単語の定義を呈示し，単語を検索してもらう課題)においてのみであり，概念駆動型課題に属する潜在記憶テストでも，ネガティブな偏りがみられない場合があるということが示された。このように，抑うつ-潜在記憶研究の結果は概念駆動型テストを用いても全く一貫しておらず，近年においてもメタ分析やレビュー論文の中で未ださまざまに論じられている(Barry, Naus, & Rehm, 2004; Barry, Naus, & Rehm, 2006; Phillips, Hine, & Thorsteinsson, 2010; Wisco, 2009)。

4.　過程分離手続き

以上のような抑うつにおける潜在記憶バイアスが一貫して示されないという問題のひとつの理由に，処理プロセスレベルでの違いが考えられる。基礎的な記憶研究では，潜在記憶テストは潜在記憶の純粋な測度かどうか，逆に顕在記憶テストは顕在記憶の純粋な測度かどうかが論じられてきている(藤田,1996; Jacoby,1991)。記憶の処理プロセスレベルでは，顕在記憶テストでは統制的処理の寄与が大きく，一方潜在記憶テストでは自動的処理の寄与が大きいとされているが，どちらの記憶テストにももう一方の処理が混入していると考えられてきている。すなわち，どのような記憶パフォーマンスにも統制的処理と自動的処理の両方が影響を及ぼしているといえる。したがって，先行研究で用いられた潜在記憶課題への統制的処理と自動的処理の寄与の程度がそれぞれ異なっているために，結果が一貫しないのではないかと考えられる。このことから，ひとつの課題でひとつの記憶プロセスを測るのではなく，同一課題の記憶パフォーマンスにおいて統制的処理と自動的処理とを分離し検討することが必要であると考えられる。

この 2 種類の処理プロセスの寄与の程度をパフォーマンスから別々に評価する手続きを過程分離手続き(process dissociation procedure; Jacoby, 1991, 1998)という。過程分離手続きについて藤田(2005)は，記憶の自動的な(Automatic; *A*)利用と意識的に統制された意図的な(Controlled; *C*)利用の 2 つのプロセスが協働してパフォーマンスを増加させる条件(包含条件)と，両者を対置させ，自動的な利用はパフォーマンスを増加させ，意図的利用は減少させる条件(除外条件)とを設け，その 2 つの条件のパフォーマンスから自動的な利用と意図的な利用のプロセスを別々に評価するものであると解説している。以下では Jacoby(1998)，藤田(2005)をもとに，語幹による手がかり再生課題を用いた場合の過程分離手続きの適用について，より具体的に解説したい。

まず，ターゲットとなる単語のリストを学習させ，その後，前述のように包含テスト条件と除外テスト条件という 2 つのテスト条件下で手がかり再生をさせる。包含テストでは，語幹を手がかりに学習語を再生するように，またもし再生できない場合は最初に浮かんだ単語で語幹を完成させるように教示される。一方除外テストでは，語幹を手がかりに学習語を再生するよう教示されるが，それは答えず(除外し)，別の単語で語幹を完成するよう求められる。併せて学習語以外に単語が思い浮かばなかった場合はパスしてよいことも告げられる。前者の包含テストのパフォーマンス，すなわち語幹が学習語で完成される確率は，語幹を手がかりにして意図的に学習語を想起できる確率(*C*)と，意図的に思い出すことはできず，なおかつ自動的に浮かんだ確率(*A*)のどちらかであり，これらの 2 つが独立しているのであれば，以下のような式で表すことができる。

$$\text{inclusion performance } (I) = C + A - CA = C + A\,(1 - C)$$

除外テストでは対照的に，学習語が想起できずに自動的に浮かんだ場合にのみ学習語で語幹を完成することになる。したがって，

$$\text{exclusion performance } (E) = A\,(1 - C) = A - CA$$

この 2 つの式を連立させると，統制的プロセスと自動的プロセスの寄与を算出できる。すなわち，

$$C = I - E$$

$$A = E / (1 - C)$$

以上のような手続き及び数式を用い，同一課題の記憶パフォーマンスにおいて統制的プロセスと自動的プロセスとを分離し検討することが可能であると考えられている。

5.　本研究の目的

これまで論じてきたように，うつ病対策に向けて認知療法･認知行動療法の普及が求められている現在，さらなる理論と技法の発展に向けて，その理論に関する基礎的な実証研究を重ねる必要があると考えられる。本研究では，抑うつの発症や持続に重要な役割を果たしていると従来から指摘されている気分一致効果のメカニズムの解明に向け，これまで一貫した結果の得られていない気分一致記憶バイアスに焦点を当てる。同一課題において記憶の統制的プロセスと自動的プロセスとを分離する過程分離手続きを用い，それぞれのプロセスにおいて抑うつにおける気分一致記憶バイアスが認められるかどうか明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

1.　実験参加者

専門学校生 151 名を対象に，冊子を用いた実験を行った。有効回答は 146 であった。

2.　刺激

青木(1971)の性格表現用語より，学生評定中央値[注 1)]4.0 以下をポジティブ語，6.5 以上をネガティブ語とし，平仮名表記 4-6 字のポジティブ語とネガティブ語を各 32 語，計 64 語を刺激として用いた。この 64 語をポジティブ語･ネガティブ語同数(16 語ずつ)の 2 つのリストに分け，一方を学習呈示語リスト，もう一方をテスト時の新項目リストとした。なお，2 つのリストがどちらのリストとなるかは，カウンターバランスした。さらにそれぞれのリストを 16 語のリストに二分し(ポジティブ語･ネガティブ語同数)，包含テスト条件，除外テスト条件にカウンターバランスして配分した。学習-テストのリスト組み合わせは 8 通りであった(図 1 参照)。また，学習呈示語リストの最初と最後にフィラー語として，学生評定中央値 4.5 以上 5.0 以下の 4-6 字の単語を各 5 語ずつ加えた。

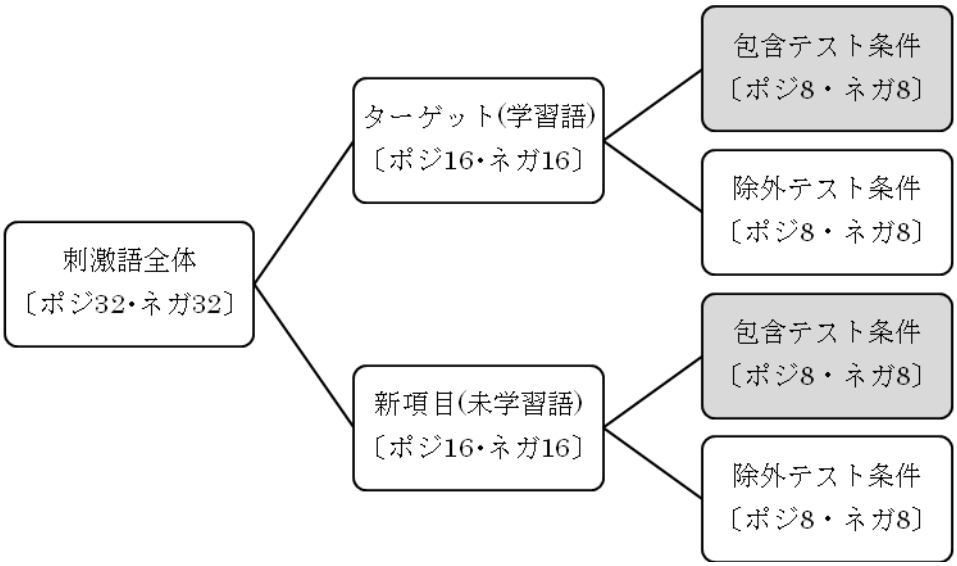

図 1　リスト構成について～刺激の分割～

注　図中の数字は単語数である。
ポジ: ポジティブ語
ネガ: ネガティブ語

3.　学習課題

学習呈示語とフィラー語計 42 語の性格表現用語の自己関連度評定(自分にどの程度当てはまるか)を 4 件法で行った。刺激の表記形態は漢字-仮名混じりであった(たとえば“冷静な”)。

4.　テスト課題及び教示

学習呈示語と新項目計 32 語についての単語検索課題を用いた。単語の辞書的な意味を手がかりとして呈示し(たとえば“感情に左右されず，落ち着いていて物事に動じない”)，単語(“冷静な”)を再生してもらう課題である。

テスト教示については，包含テスト条件では，手がかりから学習語を思い出して記述するように，また思い出せない場合には最初に手がかりから思い浮かんだ単語を記述するように求めた。除外テスト条件では，手がかりから思い浮かぶ学習語以外の単語を記述するよう教示した。学習語が思い出せない場合は，包含テスト条件と同様に，手がかりから最初に思い浮かんだ単語を記述してもらった。なお，包含テスト条件･除外テスト条件ともに，手がかりの中には学習していない単語の意味も含まれていることを明記した。

5.　手続き

冊子を用いた集団一斉方式で実験を行った。冊子の構成は，①フェイスシート，②学習課題としての性格表現用語の自己関連度評定，③単語検索の包含(または除外)テスト，④単語

検索の除外(または包含)テスト，⑤ベック抑うつ尺度(Beck Depression Inventory; BDI; 林・塚本, 1987)であった。③と④の順序はカウンターバランスした。実験参加者には，テスト条件並びに学習-テストのリストの組み合わせをカウンターバランスした 16 種類の冊子(表 2 参照)をランダムに配布し，回答を求めた。

表 2　実験冊子の種類～リストの組み合わせ～

①学習呈示語		②包含テスト呈示語			③除外テスト呈示語	
		ターゲット	新項目		ターゲット	新項目
リスト A・リスト B	—	リスト A	リスト C	—	リスト B	リスト D
リスト A・リスト B	—	リスト A	リスト D	—	リスト B	リスト C
リスト A・リスト B	—	リスト B	リスト C	—	リスト A	リスト D
リスト A・リスト B	—	リスト B	リスト D	—	リスト A	リスト C
リスト C・リスト D	—	リスト C	リスト A	—	リスト D	リスト B
リスト C・リスト D	—	リスト C	リスト B	—	リスト D	リスト A
リスト C・リスト D	—	リスト D	リスト A	—	リスト C	リスト B
リスト C・リスト D	—	リスト D	リスト B	—	リスト C	リスト A
①学習呈示語		②除外テスト呈示語			③包含条件呈示語	
		ターゲット	新項目		ターゲット	新項目
リスト A・リスト B	—	リスト A	リスト C	—	リスト B	リスト D
リスト A・リスト B	—	リスト A	リスト D	—	リスト B	リスト C
リスト A・リスト B	—	リスト B	リスト C	—	リスト A	リスト D
リスト A・リスト B	—	リスト B	リスト D	—	リスト A	リスト C
リスト C・リスト D	—	リスト C	リスト A	—	リスト D	リスト B
リスト C・リスト D	—	リスト C	リスト B	—	リスト D	リスト A
リスト C・リスト D	—	リスト D	リスト A	—	リスト C	リスト B
リスト C・リスト D	—	リスト D	リスト B	—	リスト C	リスト A

注) リスト A，B，C，D はそれぞれポジティブ語 8 語･ネガティブ語 8 語から構成された。

Ⅲ. 結果

1.　抑うつ群の設定

有効回答数 146 の BDI 得点下位 1/3 の 45 名を非抑うつ群, 上位 1/3 の 51 名を軽度抑うつ群とした。全体の BDI 平均得点は 14.04(*SD*=8.01)，非抑うつ群，軽度抑うつ群の平均得点はそれぞれ 5.87(*SD*=2.49)，22.71(*SD*=6.05)であった。

2. 学習語の再生率及び記憶の意図的利用･自動的利用の寄与率の算出

包含テスト条件と除外テスト条件の単語の種類別学習語の再生率を求めた(表 3)。Jacoby(1991, 1998)の方程式に基づき, 統制的プロセス(*C*)と自動的プロセス(*A*)の寄与率を実験参加者ごとに算出した。なお, 実験操作がうまくいかなかった実験参加者を分析から除き[注2)], 最終的には抑うつ低群 24 名, 抑うつ高群 25 名について結果を整理･分析した。統制的プロセスの寄与率を図 2 に, 自動的プロセスの寄与率を図 3 に示す。

表 3 各群のテスト条件及び単語の種類別平均再生率

			包含テスト条件				除外テスト条件			
			学習語		未学習語		学習語		未学習語	
群	*N*	BDI	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
非抑うつ	24	5.83 (2.88)	.33	.34	.06	.03	.12	.05	.07	.03
軽度抑うつ	25	22.80 (6.22)	.37	.27	.08	.06	.10	.07	.12	.06

( )内は標準偏差
ポジ: ポジティブ語, ネガ:ネガティブ語

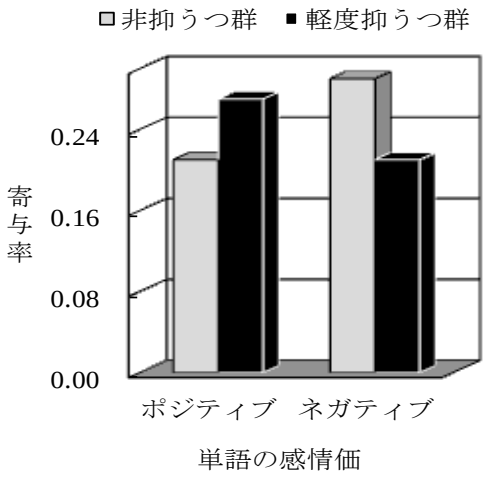

図 2 各群の単語の感情価別
統制的プロセスの寄与率

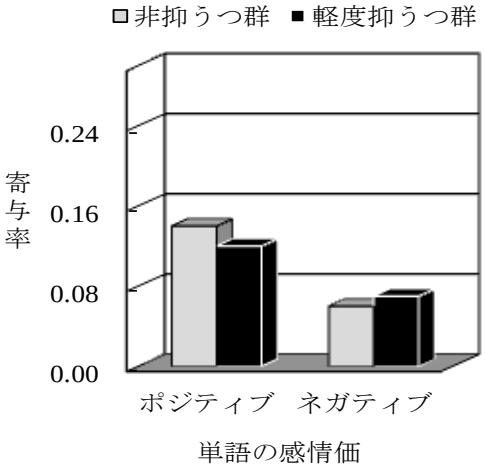

図 3 各群の単語の感情価別
自動的プロセスの寄与率

3. 統制的プロセス及び自動的プロセスにおける抑うつの気分一致記憶バイアスの検討

まず記憶の統制的プロセスの寄与率について抑うつ(非抑うつ群，軽度抑うつ群)×単語の感情価(ポジティブ，ネガティブ)の 2 要因分散分析を行ったところ，抑うつと単語の感情価との間に有意な交互作用が認められた($F(1,47)=4.38$, $p<.05$)。図 2 に示しているように，非抑うつ群ではネガティブ語の寄与率が高く，軽度抑うつ群ではネガティブ語の寄与率が低いことが示された。

次に自動的プロセスの寄与率について同様の 2 要因分散分析を行ったところ，単語の感情価の主効果のみ有意であった($F(1,47)=7.87$, $p<.01$)。抑うつの高低にかかわらずポジティブ語における寄与率がネガティブ語よりも高いことが示された。

Ⅳ. 考察

1. 抑うつにおける気分一致記憶バイアスについて

本研究では，意味的･概念的処理を反映すると考えられる単語検索課題を用い，過程分離手続きを用いて分離した統制的プロセスと自動的プロセスそれぞれにおける抑うつの気分一致記憶バイアスを検討した。その結果，抑うつは統制的プロセスに影響を及ぼすことが示されたが，気分一致バイアスではなく，抑うつが高いとポジティブ語における寄与率が高いという気分不一致バイアスが生じたといえる。一方，自動的プロセスにおいては，抑うつの程度にかかわらずポジティブ語における寄与率が高いことが示され，抑うつは自動的プロセスには影響を及ぼさないことが示唆される。

抑うつにおいて統制的プロセスで気分不一致バイアスが生じた理由のひとつとして，抑うつの程度の問題が考えられる。本研究の対象は一般学生であったため，臨床的なうつ病患者とは抑うつの質や程度が異なっている可能性があるかもしれない。田上(2003)では，BDI 得点に基づき大学生を非抑うつ，軽度，中等度，重度に四分し，顕在記憶と潜在記憶における気分一致記憶バイアスを検討しているが，顕在記憶においては，中等度抑うつ群では気分一致バイアスが示されているものの，重度抑うつ群では気分不一致バイアスが示され，抑うつの程度によって気分一致効果となるか気分不一致効果となるかが異なることを示唆している。これまで気分不一致効果を示している先行研究では，主に気分緩和動機，すなわちネガティブな気分を緩和しようという動機からポジティブな認知が促進されるという観点で説明がなされてきた(榊, 2006)。たとえば，Erber ら(Erber & Tesser, 1992; Erber & Erber, 1994)は，気分一致的か気分不一致的かは場面によるのではないかと指摘し，場面による効果の現れ方の違いを示して，気分を変えようという動機づけがある場合に気分不一致的な再生が生じると述べている。また，Rusting & DeHart(2000)は気分一致効果及び気分不一致効果を媒介する特性として，気分調整に関わるパーソナリティ変数を示唆している。彼らは，ネガティブな気分調整には個人差があることを指摘し，この個人差に関わる特性が気分不一致効果に関連していると述べている。関連して，ネガティブな気分一致効果は自尊心の低い者に特徴的であり，自尊心が高い者は気分不一致再生を示すことも見出されている(Smith & Petty, 1995)。このように単に動機づけからの観点ではなく，それに関わるパーソナリティ変数が気分不一致効果に関与している可能性も考えられるだろう。さらに別の観点として，榊(2006)は自己複雑性

(self-conplexity)という自己知識の構造の個人差が気分不一致効果に影響を及ぼすこと，すなわち自己複雑性が高い人ほど気分不一致効果を示しやすいことを提唱し，自伝的記憶の想起に関する実験からそれを検証している。

以上のように，気分緩和動機やパーソナリティ特性，自己知識の構造といったことが気分不一致効果に影響を及ぼしていることがこれまで論じられてきているが，抑うつとそれらの変数がどのように関連するかは未だ明らかではない。近年においても，抑うつにおける認知バイアスと感情調整を結びつけるような実証研究が非常に数少ないことが指摘されている(Joormann & D'Avanzato, 2010)。今後はそのような研究を重ね，変数間の関係を明らかにしていくことが必要であると考えられる。また Rusting & DeHart(2000)は，気分調整方略による気分不一致記憶をネットワークモデルからも説明でき得ることを示唆しているが，本研究の結果から示唆された抑うつの程度や質の違いの影響も含め，新たなモデルを検討していくことが望まれよう。

次に本研究では意味的･概念的処理をより要すると考えられる単語検索課題を用いたが，自動的プロセスには抑うつの影響は認められなかった。気分一致効果研究ではないが，同様に過程分離手続きを用い抑うつが記憶パフォーマンスに及ぼす影響を検討している Hertel & Milan (1994)，Jermann, Van der Linden, Adam, Ceschi, & Perroud(2005)においても，自動的プロセスには抑うつが影響しないことが示されている。すなわち，気分一致効果にかかわらず，過程分離手続きを用いて自動的プロセスを抽出した場合は，抑うつの影響はみられないといえるのではないだろうか。したがって，抑うつにおける気分一致潜在記憶バイアスが生じるのは，潜在記憶と顕在記憶とを別の課題として分けて検討する場合であり，用いられる潜在記憶課題にかなり統制的プロセスが寄与している場合にバイアスが生じる可能性があると考えられる。

また，Hertel & Milan(1994)は転移適切処理(transfer-appropriate processing; TAP)の観点から説明を試みてもいる。TAP とは，学習時とテスト時に類似した認知プロセスが活性化されると転移が適切に行われ，学習された刺激はより検索しやすくなるという現象であり(Graf & Ryan, 1990)，潜在記憶における気分一致バイアスの結果の一貫性のなさについても TAP からの説明が行われてもいる(Barry et al., 2004; Phillips et al., 2010; Watkins, 2002)。たとえば Phillipis et al.(2010)は，TAP の観点から 2 つの説明があり，論争が続いていると述べている。1 つは符号化課題と検索課題の両方で同じ処理水準が行われた場合にのみ潜在記憶バイアスが生じるという立場であり(Barry et al., 2004)，もう 1 つは，概念的処理が符号化時と検索時の両方で行われた場合にのみ抑うつバイアスが生じると主張する立場である(Watkins, 2002; Wisco,2009)。Phillips et al.(2010)のメタ分析では前者を支持する結果となったと述べているが，この点についてはさらに検討していく必要があるだろう。

2.　今後のうつ病対策に向けて～抑うつの認知理論への示唆～

本研究では，統制的プロセスにおいても自動的プロセスにおいても気分一致記憶バイアスは示されなかった。これまで述べてきたように，気分一致効果が抑うつの発症や持続，悪化に重要な役割を果たしていることは，認知療法･認知行動療法の基礎的な理論のひとつとして位置づけられていることではあるが，この現象がみられるのは限られており，ある種の認知においてはそれがみられなかったり，あるいは逆の現象が生じたりすることを本研究は示唆

しているといえよう。

気分一致効果が抑うつを悪化させる原因として提唱されているのと同様に，気分不一致効果は抑うつの予防や緩和の手段として考えられるかもしれないと Parrott & Sabini(1990)は述べている。気分不一致効果は，抑うつにおける認知と抑うつ気分の悪循環を断ち切る現象であるとも考えられる。また自動的プロセスにおいて気分一致効果がみられないということは，ネガティブな悪循環に巻き込まれずに保たれている機能が存在しているということにもなると考えられる。このような従来のモデルからは説明しにくい知見について吟味し検討を重ねていくことで，モデルの修正や拡張，新たなモデルの構築にもつながり，さらなる効果的な技法の開発にもつながるであろう。

また本研究ではうつ病患者ではなく健常学生を対象としたが，抑うつが比較的高くても日常生活をある程度営むことができるような場合には，抑うつにおける気分一致効果は生じにくいというような可能性も考えられ得る。たとえばうつ病患者と抑うつ傾向の高い健常者とでは，抑うつ気分や抑うつ尺度で測定されるような状態の違いはあまりなかったとしても，気分一致効果に影響していると考えられる自己知識構造や動機づけ，自尊心などのパーソナリティに大きな違いがある可能性もあるだろう。こういった違いが明らかになっていけば，予防や発症に関わる要因の発見にもつながっていくものと考えられる。実験的な心理学的研究は臨床群を対象には行いにくいのが日本の現状であると考えられるが，健常者を対象とした抑うつ研究を単なるアナログ研究として位置づけるのではなく，予防や発症プロセスに関わるメカニズムの解明に役立ち得るものとして積極的な意義を持たせて研究を重ねていくことも，より効果的な治療や予防法の開発に向けて必要であるだろう。

3.　今後の課題

最後に本研究の限界と課題を 2 点述べたい。本研究では，実験操作のうまくいかなかった被験者がかなり存在した。また全体として再生率がかなり低い結果であったと考えられる。実験操作が成功した者と失敗した者とでは，何かしらの認知的処理の相違や抑うつや気分の質の相違が存在している可能性も考えられ，この点に関する検討も必要ではあるが，今後は刺激材料や実験状況をより統制し，実験手続きを精緻にした上で，抑うつにおける記憶バイアスを実験的に検討していく必要があると考えられる。

2 点目としては，先にも少し触れたが本研究は学生を対象にしたものであり，本研究の結果を単純に抑うつやうつ病の理論に一般化して考えることはできない。従来の抑うつの認知理論の修正や拡張，新たな予防や発症に関する理論の構築に向けて，臨床群との知見の比較やさらなる知見の蓄積が必要であるだろう。

注1)　青木(1971)は性格表現用語の望ましさについて，学生と一般成人に評定を求め，それぞれの中央値を算出している。本研究では研究の対象を専門学校生としたため，学生の方の値を用いた。

注2)　方程式からも分かる通り，仮説的には包含条件パフォーマンスが除外条件パフォーマンスを上回るものとされており，除外条件パフォーマンスが上回った場合，寄与率の値はマイナス値となる。そこで除外条件パフォーマンスの方が上回った者は教示の理解が十分ではなかったとみなし，除いて分析することとした。

文献

1) 青木孝悦 (1971) 性格表現用語の心理-辞典的研究―455 語の選択, 分類および望ましさの評定― 心理学研究, 42, 1-13.
2) Barry, E. S., Naus, M. J., & Rehm, L. P. (2004) Depression and implicit memory: Understanding mood congruent memory bias. *Cognitive Therapy and Research*, 28, 387-414.
3) Barry, E. S., Naus, M. J., & Rehm, L. P. (2006) Depression, implicit memory, and self: A revised memory model of emotion. *Clinical Psychology Review*, 26, 719-745.
4) Beck, A. T. (1976) *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York: International University Press.
5) Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979) *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford.
6) Blaney, P. H. (1986) Affect and memory: A review. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
7) Bower, G. H. (1981) Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
8) Denny, E. B., & Hunt, R. R. (1992) Affective valence and memory in depression: Dissociation of recall and fragment completion. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 575-580.
9) Erber, R., & Erber, M. W. (1994) Beyond mood and social judgment: Mood incongruent recall and mood regulation. *European Journal of Social Psychology*, 24, 79-88.
10) Erber, R., & Tesser, A. (1992) Task effort and the regulation of mood: The absorption hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 28, 339-359.
11) 藤田哲也 (1994) 潜在記憶研究における単語完成をめぐる問題 心理学評論, 37, 72-91.
12) 藤田哲也 (1996) 記憶における自動的処理と意図的処理―過程分離手続をめぐる問題について 京都大学教育学部紀要, 42, 73-89.
13) 藤田哲也 (2005) 記憶の自動的利用における処理水準効果: 過程分離手続による検討 法政大学文学部紀要, 50, 125-144.
14) Graf, P., & Schacter, D. L. (1985) Implicit and explicit memory for new associations in normal and amnesic subjects. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 11, 501-518.
15) Graf, P., & Ryan, L. (1990) Transfer-appropriate processing for implicit and explicit memory. *Journal of Experimental Psychology, Leaning, Memory, and Cognition*, 16, 978-992.
16) Hertel, P., & Milan, S. (1994) Depressive deficits in recognition: Dissociation of recollection and familiarity. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 736-742.
17) 林潔・塚本嘉寿 (1987) Beck Depression Inventory(新改定版)についての検討 埼玉大学紀要: 総合篇, 6, 45-57.
18) Jacoby, L. L. (1991) A process dissociation framework: Separating automatic from intentional uses of memory. *Journal of Memory & Language*, 30, 513-541.
19) Jacoby, L. L. (1998) Invariance in automatic influences memory: Toward a user's guide for the process dissociation procedure. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 24, 3-26.

20) Jermann, F, Van der Linden, M., Adam, S., Ceschi, G., & Perroud, A. (2005) Controlled and automatic uses of memory in depressed patients: Effect of retention interval lengths. *Behaviour Research and Therapy*, 43, 681-690.
21) Joormann, J., & D'Avanzato, C. (2010) Emotion regulation in depression: Examining the role of cognitive processes. *Cognition and Emotion*, 2010, 24, 913-939.
22) 慶應義塾大学認知行動療法研究会編 (2009) うつ病の認知療法･認知行動療法治療者用マニュアル　厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」　厚生労働省ホームページ
〈http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/kokoro/dl/01.pdf〉(2013 年 2 月 27 日閲覧)
23) 越川房子 (2010) マインドフルネス認知療法: 注目を集めている理由とその効果機序 ブリーフサイコセラピー研究, 19, 28-37.
24) 厚生労働省 (2012) 平成 23 年(2011)患者調査の概況　厚生労働省ホームページ
〈http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/11/index.html〉(2013 年 2 月 27 日閲覧)
25) 厚生労働省自殺･うつ病等対策プロジェクトチーム (2010) 誰もが安心して生きられる, 温かい社会づくりを目指して～厚生労働省における自殺･うつ病等への対策～　厚生労働省ホームページ
〈http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/jisatsu/dl/torimatome_2.pdf〉(2013 年 2 月 27 日閲覧)
26) 熊野宏昭 (2012) 新世代の認知行動療法　日本評論社
27) Newell, R., & Dryden, W. (1991) Clinical problems: An introduction to the cognitive-behavioural approach. In W. Dryden & R. Rentoul (Eds.), Adult clinical problems: A cognitive-behavioural approach. London: Routlege, Pp.1-26.
(ニューウェル R.･ドライデン W.　丹野義彦(訳) (1996) 認知行動アプローチの基礎理論 ドライデン W.･レントゥル R.　丹野義彦(監訳)　認知臨床心理学入門―認知行動アプローチの実践的理解のために―　東京大学出版会　Pp.9-54.)
28) Parrott, W. G., & Sabini, J. (1990) Mood and memory under natural conditions: Evidence for mood incongruent recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 321-336.
29) Phillips, W. J., Hine, D. W., & Thorsteinsson, E. B. (2010) Implicit cognition and depression: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 30, 691-709.
30) Roediger, H. L. (1990) Implicit memory *American Psychologist*, 45, 1043-1056.
31) Roediger, H. L., & McDermott, K. B. (1992) Depression and implicit memory: A commentary. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 587-591.
32) Rusting, C. L., & DeHart, T. (2000) Retrieving positive memories to regulate negative mood: Consequences for mood-congruent memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 737-752.
33) 榊美知子 (2006) 自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響　心理学研究, 2006, 217-226.
34) Schacter, D. L. (1987) Implicit memory: History and current status. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 13, 501-518.
35) 清水馨・鈴木伸一 (2011) うつ病の認知行動療法の実際　心身医学, 51, 1079-1087.

36) Smith, S. M., & Petty, R. E. (1995) Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1092-1107.
37) 田上恭子 (1999) 抑うつにおける潜在記憶バイアス　日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 567.
38) 田上恭子 (2003) 抑うつの程度が潜在記憶に及ぼす影響　弘前大学教育学部紀要, 90, 193-199.
39) Teasdale, J. D. (1983) Negative thinking in depression: Cause, effect, or reciprocal relationship? *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 5, 3-25.
40) Watkins, P.C. (2002) Implicit memory bias in depression. *Cognition and Emotion*, 2002, 381-402.
41) Watkins, P. C., Martin, C. K., & Stern, L. D. (2000) Unconscious memory bias in depression: Perceptual and conceptual processes. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 282-289.
42) Watkins, P. C., Mathews, A., Williamson, D. A., & Fuller, R. D. (1992) Mood-congruent memory in depression: Emotional priming or elaboration? *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 581-586.
43) Watkins, P. C., Vache, K., Verney, S. P., Mathews, A., & Muller, S. (1996) Unconscious mood-congruent memory bias in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 34-41.
44) Wisco, B. E. (2009) Depressive cognition: Self-reference and depth of processing. *Clinical Psychology Review*, 29, 382-392.

Asian Journal of Human Services
VOL.4 April 2013

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

A Research Study on the Disaster Prevention and Disaster Risk Reduction of the Rehabilitation Facilities for the Disabled..... **Keiko KITAGAWA**,et al. · 1

Current Conditions and Effectiveness of the Housework Home Care Visiting Helper program in Korea.....**Sunwoo LEE** · 14

Recognition of the Necessity of Practical Disaster Nursing Education among Nursing Teachers in Japan.....**Hitomi MATSUNAGA**,et al. · 30

The Relationship between Social Participation and the Health Related Quality of Life of the Community-Dwelling Elderly in South.....**Sookkyoung BAE**, et al. · 40

Inhibitory control measured using the Stroop color–word test in people with intellectual disabilities.....**Yoshifumi IKEDA**,et al. · 54

Memory Biases in Depression Investigated by the Process Dissociation Procedure to Develop Countermeasure against Depression..... **Kyoko TAGAMI** · 62

QOL-based research for laws that promotes the employment of persons with disabilities -Analysis and examinations of using WHOQOL-..... **Haejin KWON**,et al. · 77

REVIEW ARTICLES

Korean Rehabilitation Counseling Practice and Personnel Training.....**Hyunuk SHIN** · 88

Theoretical Background of Health Related Quality of Life (HRQOL) and Literature Reviews on its Definition.....**Aiko KOHARA**,et al. · 103

Recent Research Trends in Survivor Syndrome -After the Restructuring, the Psychology of the People who Remain in the Organization-.....**Kohei MORI**,et al. · 113

Present Condition and the Subject of Infants with Disabilities Education and Childcare - Focus to Schools for Special Needs Education Kindergarten Section-..... **Yoshio KOJIMA** · 121

SHORT REPORT

Classification of the clinical characteristics for elderly patients with Alzheimer's-type dementia..... **Mayumi NOSE**,et al. · 137

ACTIVITY REPORT

Analysis of the communication between volunteers and elderly people with dementia..... **Misako NOTO**,et al. · 149

Printed by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan